

卒業論文の要旨

論文題目	嗅覚、味覚、触覚によるユニバーサル展示の有効性
氏名	杉山乙葉
メジャー	博物館学
(要旨) 近年、博物館はユニバーサル・ミュージアム(誰もが楽しめる博物館)として展開し、新しい学びを提供し続けている。2021 年には、大阪府にある国立民族学博物館(通称・民博)の特別展「ユニバーサル・ミュージアム さわる! “触”の大博覧会」が開催され、2.6 万人の来館者数を記録した。コロナ禍を経て成功を収めたこの特別展を機に、多くの博物館、美術館で五感をテーマにした展覧会、展示が行われるようになった。筆者は民博をはじめとする、五感の体験展示が行われている博物館や展覧会へ実際に足を運んだ。本論では、博物館のほか、商業施設等も対象として、誰もが楽しめる体験型イベントや展覧会における五感の体験展示の比較を行った。 まず、社会のユニバーサル化を知るために、バリアフリーやユニバーサルデザイン(以下、「UD」)の仕組みを確認した。内閣府が行った『バリアフリー・ユニバーサルデザインに関する意識調査』の結果から、福祉施設や医療施設などの特定の人に需要がある施設に比べ、博物館や学校などの日常的に使う教育施設は、UD 化がまだ十分ではないことがわかった。筆者は、桜美林大学町田キャンパスを例に、身近な教育施設における UD の利点と問題点を探し、その上で、長野県立美術館とふれる博物館の施設整備についてハード面から確認した。 次に、博物館は特別支援学校や高齢者等との連携も深めていることから、明治大学が進めるプロジェクト「いんくるん」や、神奈川県立生命の星地球博物館が行う生涯学習活動について、ソフト面から調べた。 最後に、展示の UD 化の中で、五感のうち嗅覚、味覚、触覚の体験展示に限定し、それぞれの理想的な展示方法を見つけていく作業を進めた。博物館と商業施設における展示の違いに着目し、実際の展示の観察や体験をもとに分析した。 その結果、体験展示には、展示の題材選びが最も重要で、開催にあたっては、来館者と資料との距離感や施設空間のあり方など、多くの要因が関係していることがわかった。誰もが楽しめる体験展示を開催することは、博物館と商業施設双方で有効であることが確認されたが、嗅覚、味覚、触覚について感覚ごとに展示を検討すると、有効性はそれぞれ異なることが判明した。	
(指導教員の推薦のコメント) 2006 年に「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」(バリアフリー法)が施行され、博物館等の施設もバリアフリー化やユニバーサルデザイン化が推進されてきた。本研究は、その研究や実践を推進する国内の代表的な博物館・美術館を対象に、現地調査を重ね、分析・検討を行ったものである。 筆者は健常者であるが、各施設に出向いて実際に自身で展示を観察・体験し、それをもとにハード・ソフトの両面から、施設ごとの展示の特徴を比較検討した。興味深いのは、同じ展示であっても、博物館展示と商業展示には、方向性に大きな違いがあり、それぞれの有効性について言及している点である。本稿は、自らがフィールドワークを重ね、その成果を取りまとめた労作と言える。	

